

ほがらかに生きる 大学は知の宝庫

一東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2021一

社会貢献委員会

要 約

本学は毎年、社会貢献委員会の主催で公開講座のシリーズを実施している。本学の教員は地域住民のために自分の研究分野に関連する生活に役立つ情報を提供している。今年度のシリーズのテーマは当たり前となったさまざまな生活の要素を積極的に考えて生きることだった。

これらの公開講座の記録を今まで本学のホームページで公開してきたが、講演は授業でも学会発表でもなく、教員の研究の成果になっている。昨年度から研究の記録をこの研究年報でも報告することにした。

キーワード：公開講座、健康寿命、認知症、色、山田耕柝、童謡、唱歌、聴覚、東日本大震災、ダニー・ケイ

第1回 健康寿命を延ばすには

講師 杉下毅（本学講師）

10/5（火）13:30～15:00

令和3年度第1回公開講座（受講者46名）が10月5日に開催されました。今年度の共通テーマ「ほがらかに生きる」より健康福祉学部管理栄養学科の杉下毅先生は「健康寿命を延ばすには」の演題で本日講演されました。講演時間が約90分と長時間にわたったために質疑時間は特に設けられませんでした。受講者は最後まで聞き入っておられました。また、講演終了後、個別に質問あるいは相談に来られた方もみえました。

講演内容としては、まず日本人の平均寿命はこのところ男女共に更新し続けており昨年の平均寿命は女性で87.74歳、男性で81.64歳に達し、それに伴い今年9月に公表された65歳以上の高齢者の割合も29.1%（女性で32.0%、男性で26.0%）と世界で最も高齢化の進んでいる国であることや、この平均寿命の中には介護を必要とする期間等、日常生活に制限のある期間（いわゆる不健康期間あるいは延命期間）も含まれていることが説明されました。そこでこの不健康期間を少しでも短くするために、現在、厚生労働省が取り組んでいるスマートライフプロジェクトについて解説されました。スマートライフプロジェクトとは禁煙はもちろんのこと、毎日の運動量や食生活を改善し、更に定期的な健診や検診を受けることによって日常生活に制限のない期間である健康寿命の延伸を図ろうと、厚生労働省が平成23年から展開している国民運動です。

毎年の様に平均寿命が延び、更新し続けると、これから

は平均寿命以上に健康寿命を延ばすことがより重要となっていきます。男女平均で10年近くある平均寿命と健康寿命の差をなるべく短くして、出来る限り亡くなる直前まで健康な生活を送り続ける「ピンピンコロリ」を目指したいという希望を多くの方が抱いていると思われます。この思いに少しでも近づけるためには常日頃から健康に関心を持ち、健康寿命を延ばすために何が必要かを知り、それを実践し続けていくことの重要性を話されました。具体的には介護が必要となる主な原因である認知症や脳血管疾患（脳卒中）、更には介護状態になる手前のサルコペニアやフレイルについて、日頃からの予防策や早期発見に結びつける方法、また、既に発症している場合には更なる悪化の防止策や早期の復帰に向けた取り組みについて話されました。

健康寿命の延伸には生活習慣病（高血圧や糖尿病等の原因の1つである食生活の乱れ、アルコールの過剰摂取、喫煙、肥満、運動不足等）の予防や健診（必要であれば2次健診を必ず受ける）、フレイルの対策、口腔機能の維持や歯科健診が重要であると強調されていました。講演内容は多岐に渡っていましたが、テーマに沿った内容であり、大変参考になる講演でした。

（文責 佐藤恵彦）

第2回 認知症の方を支える家族の理解

～私たちにできること～

講師 大野さおり（本学講師）

10/14（木）13:30～15:00

令和3年度第2回公開講座（受講者41名）が10月

14日に開催されました。本学講師の大野さおり先生による「認知症の方を支える家族の理解～私たちにできること～」と題された講演は、認知症を支える介護者の立場と家族について考えようという興味深い内容の話でした。もし自分が認知症になったら、家族に何を望むのか、また、認知症の家族がいた場合、介護者と家族の接し方などをどのようにしたら良いかなどのお話をしました。

まず、認知症のタイプは大きく分けて2つあります。1つは现阶段では治療が困難といわれている認知症、これにはアルツハイマー型認知症(約60%)、脳血管性認知症(約20%)、レビー小体型認知症(約10%)、前頭側頭型認知症(約10%)がある。もう1つは、早期発見・早期治療で症状が改善できる認知症で、慢性硬膜下血腫、正常圧水頭症、ホルモン異常、薬物の副作用などによって起こる認知症があることです。

次に認知症には2つの症状があることが説明されました。1つは中核症状で認知症であれば、必ずみられる症状で改善が困難なものです。これはすべての認知症の人にみられる症状(記憶障害・見当識障害、実行機能障害、失行・失認・失語、理解・判断力の低下)です。もう1つは周辺症状で、体の状態や周囲の環境、対応の仕方によって現れる症状が違い改善の可能性のあるものです。必ずしもすべての人にはみられないが具体的な症状としては、徘徊・妄想・幻視・幻聴・興奮・暴言・暴力、食行動異常・排泄行動異常、介護への抵抗などがあることです。

認知症高齢者の対応で気を付けてほしいポイントは、理屈は通用しないので人格を尊重して、納得させるように接するようにすること。また、孤独は認知症の進行を早めることから一人ぼっちにしないようにし、好きなことを一緒にすることで感情が動き出すからです。

しかしながら、認知症高齢者に対して過保護にすることではなく本人にできることはしてもらうようにし、いつも身近にいて安心感をもたせるようにするようにしてあげることが大切です。また、感情や自尊心は残っているので、子ども扱いしたりばかにしたり、からかったりしないようにして、その人のペースに合わせてゆっくりと進めることが大切です。

介護者の立場と家族には、直接介護者、間接的支援者、傍観的家族と分けられ、同じ「家族」でも、いろいろな立場があります。家族には期待するものと求められるものがあり、周囲(社会、地域、他社)からも求められるもの、自分自身で求めてしまうものと期待するものとのギャップがある。そのため、家族には、身体的、精神的、

社会的、経済的な負担が生まれます。

これらには、とまどい、否定、混乱、怒り、拒絶、割り切り、あきらめなどがあり、最終的には受容する気持ちを持つことが大切であり、家族(直接的介護者)にはストレスを軽減させるようにすることが必要で、社会資源(地域包括センター、社協、介護保険事業所等)へ相談することも一つであることが話されました。

認知症の知識やそれを支える家族についての関係が十分に考えさせられる講座でした。

(文責 小林和典)

第3回 色と共にほがらかに生きる

講師 廣瀬敏史(本学准教授)

10/20(水) 13:30~15:00

令和3年度第3回公開講座(受講者30名)が10月20日に開催されました。人間関係学部子ども発達学科准教授の廣瀬敏史先生による「色と共にほがらかに生きる」というテーマの講演でした。また講演のあと、パステル等を用いて講演内容を実践に移す実践活動が行われました。

廣瀬先生は、東京芸術大学で彫刻を学ばれた後ドイツ留学をされました。その後10年ほどの造形活動を経て本学8年目というご経歴をお持ちだそうです。会場は廣瀬先生の講演を受講し、実践活動をするのを心待ちにされている受講者の方々が一杯となりました。講演によって色に関する知識を深めたあと、その内容を実践に移すという理論的な要素と実践的な要素が組み合わせられた大変興味深い内容でした。その中で特に印象に残った点をご紹介します。

私達の日常生活には自然の色からテレビのスクリーンの色にいたるまでありとあらゆる色に囲まれています。そもそも色が見える仕組みはどうなっているのでしょうか?それは、光の中の波長で、物に反射したり透過した波長を網膜が認識するとき色を感じるということです。私達が見ることができる光、可視光線は380~780nmの波長だそうです。また人の目は約187万5,000色もの色を見分けられるそうです。

ニュートンの分光実験の考えが不十分であると異論を唱えたのがゲーテでした。ゲーテの色彩論によると、色彩は自然の摂理と人間の眼の共同作業で決定されるということです。受け手の体調や置かれた状況によって感じ方も変わるといえるそうです。色彩論の重要なポイントとして有色残像の発見があります。つまり人の眼は、色に出会うと別の色「補色」を生み出すというものです。さ

らにゲーテの色彩調和論の色相環という色を施した環では、反対にあるものが補色となっています。例えば、オレンジと青は補色関係にあります。また、色相環は左右で黄色のような暖色と青のような寒色にも分かれています。ゲーテによると寒色系は闇（マイナス）を、暖色系は光（プラス）を表します。よってプラス・マイナスの中間にある赤色は高貴な色であり反対にある補色の緑色は平凡な色になるそうです。

モネやゴッホに代表される 20 世紀初頭の印象派の画家たちは、ゲーテの色彩論を応用し、戸外の明るい雰囲気をとらえることに成功しました。つまり黒色は使わず補色を用いて影を描き光の表現に成功しました。その結果、それまでのダ・ヴィンチやレンブラントのような黒色を使って影を表現していた暗い絵画とは一変しました。

色に関する一連の知識を深めたあと、全受講者が実践活動に移りました。各自、好きなフルーツと表面に凹凸のある好きな色のマーマード紙を選び、パステルで描いてみようというものでした。その際、影は黒やグレーで暗くするのではなく、補色を混ぜて表現してみましようということでした。パステルは、発色が良く最終素材として使用されたり、パステルのみで完成させる絵画もあるほど物質として力のある素材だそうです。またパステルの使い方は、指でこするということでした。受講者の方々は適宜、廣瀬先生からの的確なアドバイスを受けながら実践活動に没頭してみえました。また、とても和やかに楽しそうに作品作りをされていて、実際に「楽しいね！」という言葉が何度も飛び交っていました。正に『色と共にほがらかに生きる』というテーマにピッタリだと思いました。

今回の講演及び実践を経て、日常目にして色の中に実は色んな色が隠れているということが分かり驚きと共に大変感銘を受けると同時に、色への反応や色の見方も変わってくるように感じられました。

(文責 白木麻美)

第 4 回 山田耕筈、童謡・唱歌の世界

「歌は朗らかな光」

講師 内田恵美子（本学講師）

11/10（水）13:30～15:00

令和 3 年度第 4 回公開講座（受講者 40 名）が 11 月 10 日に開催されました。今年度の共通テーマ「ほがらかに生きる」の中で、内田恵美子先生は「山田耕筈、童謡・唱歌の世界:歌は朗らかな光」の演題で講演されました。

山田耕筈は、童謡「赤とんぼ」で知られる作曲家ですが、オペラなど 1,600 曲以上も作曲されています。更に指揮者としてオーケストラを各地で作り、その育成にも尽力されています。また、ワーグナーを日本で初めて紹介した人物であり、多数の著書を残しています。まさに、日本の音楽芸術の基礎を築いた偉大な作曲家でありました。

内田先生は、山田耕筈が音楽とともに生きた生涯について、代表曲を鑑賞しながら解説されています。また、曲の演奏において歌を内田恵美子先生、ピアノを野村知子先生と橋本亜紀先生、そして湯浅卓雄氏の指揮によるアルスター交響楽団が加わり、非常に有意義な講義でした。講義内容としては、山田耕筈の生涯を 1886 年の出生から 1965 年の逝去までを 5 つの時代に分類して解説されています。

最初は、山田耕筈の出生から音楽を志すまでの内容でした。

キリスト教の家庭で、7 人兄弟の 6 番目に生まれた耕作は、それほど裕福ではなかったが、家にはバイオリンとオルガンがあり英語で賛美歌を歌うという、恵まれた環境で育っています。そのため、幼少期から英語が堪能であり、このことが後々功を奏してくるようです。

その後、横須賀に移りますが、そこでは常に音楽が聞こえている生活であり、7 歳頃から既に音楽家になる決意をしているようです。また、築地の外国人居留にいた頃のエピソードですが、それまではバイオリンとオルガンの音を聞いて育った耕筈ですが、異人館から聞こえるピアノの音を初めて聞き衝撃を受け、音楽の虜になっていきます。

一番上の姉は日本人として初めてイギリス人(エドワード・ガントレット)と結婚して戸籍に入った人です。ここでのエピソードとして、耕筈はエドワードさんの譜めくりをしていたようです。譜めくりは楽譜が読めないといけない仕事であり、耕筈は楽譜に対する独自のノートを作成して譜めくりを行っています。これにより、耕筈の高い音楽能力が認められ、エドワード夫妻と同居することとなります。

その後、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に入学しますが、本来は作曲科に入りたかったようですが、その頃は作曲科がなかったため声楽科に入学しました。

しかし、作曲家を志す耕筈は声楽科で作曲を行います。但し、自分の名前では公表できないため外国人の適当な名前を付けて演奏していましたが、誰も耕筈の曲だとは気づきませんでした。唯一、マイスター教授だけは耕筈の

作曲と気づき、才能を認めることとなります。更に、マイスター教授は音楽愛好家であった男爵（岩崎小弥太）にベルリン留学の資金援助をお願いしています。そして1910年、無事にドイツのベルリン王立芸術アカデミーに合格して、留学することとなります。この時の受験生は47名、合格者はたった3名でした。

世界各国から西洋音楽を学んだ受験生が集まり受験していますが、日本では作曲を勉強する方法やレコードも無い時代であり、その中で合格していることは如何に耕筈が音楽の才能に満ちていたかが伺われます。念願の音楽の勉強を思う存分行うこととなりますが、同時にドイツ語の勉強も必死に行っています。

その後、1910年に三木露風の詩集から日本人初の芸術歌曲「嘆き」を作曲します。これは失恋のショックから作曲したとされています。

曲を鑑賞しましたが日本の曲ではなく、まるでシューベルトを聞いている感覚です。

そして1912年、日本人初の交響曲「かちどきと平和」を作曲します。その中でも評価の高い第3楽章を鑑賞しました。留学後2年、26歳で作った曲ですが、この曲もベートーヴェンやブラームスが作った曲に感じられます。またこの曲の楽譜が戦争で焼けてしまったため、日本では長い間演奏できませんでしたが、2年前に楽譜を集めることができ演奏されています。

そして1913年、日本人初のオペラ「墮ちたる天女」が誕生します。これは、山田耕筈が作曲、坪内逍遙の台本で作られました。このオペラは1914年にドイツでの初演が決まり、衣装や舞台の打ち合わせのため日本に帰国した耕筈でしたが、第1次世界大戦が勃発したためドイツに帰れなくなり、日本で活動することとなります。

日本では岩崎小弥太の資金援助もあり、東京フィルハーモニー協会でも毎月耕筈の曲の演奏会が開催されています。この時耕筈は「日本の未開拓の音楽原野を切り開くのは自分しかない」と言っています。そのために何をすべきか。
①全国にまたがる演奏会網を作る。②同志を糾合して演奏会を全国的に展開する。③職業団体の組織と定期演奏会を開く。しかも20年後に実現できるとしています。自分が捨て石となり2代、3代先のことを考えていました。

また耕筈は、「日本語のアクセントと旋律が融合していないことに不安と失望を感じた」とも語っています。そこで1916年、三木露風の「唄」を作曲しています。この曲は音楽が詩に入っているのではなく、詩と一つになって流れているとしています。

その後1917年「野薔薇」が作曲されます。この曲によって、詩と音楽の融合が完成に近づき、1925年の「からたちの花」によって完成することとなります。

1915年頃はドイツが戦渦であり、ロシアも革命が起こったため活動できない音楽家たちはアメリカに集結していました。耕筈も1918年渡米しカーネギーホールで演奏することとなりましたが、公演は大変な反響を受け、アメリカ政府から全米での演奏と講演を委託されます。そしてニューヨーク近代音楽協会会員にも推薦されています。つまり、海外が日本より先に山田耕筈を認めました。

日本においても洋楽に対する人気が高まってきます。ヨーロッパの著名な音楽家が来日してピアノリサイタルなどが開かれるようになります。また、1918年、童謡「赤い鳥」が創刊され、婦人雑誌にも楽譜が載るようになり、一般の方にも音楽が浸透していきます。耕筈も世界の著名な作曲家の曲を紹介、演奏しつつ自分の作品も精力的に発表していきます。

そして、耕筈が36歳のとき北原白秋と出会い、1926年の「からたちの花」によって曲と詩の融合が完成されます。

この歌詞を朗読すると、いつの間にかメロディーを口ずさんでいるように抑揚がそのまま詩になっています。

1922年には、北原白秋の「AIYANの歌」において、連作歌曲の頂点に立ちます。

耕筈は「日本語のアクセントは高低アクセント、抑揚であるためアクセントのある音節を、その前の音より高い音に置けばよい」という方法を考え出します。これにより日本語のアクセントと旋律の融合は完成されていきます。

そして、関東大震災、第2次世界大戦、終戦と激動の時代となりますが、耕筈は精力的に活動していきます。レコード会社の専属となり、ロシアやイタリアからの招待も受けています。

その後1947年、オペラ「香妃」を完成させるが、闘病生活をはじめ作曲や著作は減少していきます。その中でも耕筈は多くの勲章を授与され、広く認められていきます。しかし1965年に病気が悪化し79歳で逝去されます。

耕筈には、苦しい生活の中でも心が癒された瞬間がありました。湘南に帰り子どもたちが遊んでいる姿を見ることにより、童心に帰り心が癒されます。その中で作った曲が「赤とんぼ」でした。

最後の曲「赤とんぼ」では受講者の多くが曲を口ずさんでおり、最後まで受講者を魅了する有意義な講義であったと感じました。

（文責 佐藤恵彦）

第5回 聴覚（聞こえ）の衰えと認知症の 予防対策 ～最近、会話が聞き取りにくいこと はありませんか？～

講師 松森久美子（本学准教授）

11/22（月）13:30～15:00

本日の講師は言語聴覚士という観点から難聴と認知症との関係について話しました。

最近、難聴は認知症の大きな原因だと言われるようになりました。特に、2017年の国際アルツハイマー病会議において、ランセット国際委員会が難聴を高血圧、肥満、糖尿病などと並べて認知症の危険因子の一つとしました。さらに、昨年度の研究において、難聴は予防可能な認知症の因子の中で、最も大きな危険因子だとわかりました。

また、難聴の予防自体が、認知症の予防にも大変有効だそうです。その理由は、生活習慣病と違って、難聴は脳自体を危険にさらしているという訳ではないからです。聴覚に障害がある場合、人は聞こえようと無理に努力するときに、脳のワーキングメモリーを過剰に使うために、情報を処理するゆとりがなくなり、認知症のような症状が現れます。一方、聴く力が回復すれば、脳への負荷は少なくなり、認知症的な症状は弱くなる人が多いそうです。

人間は空気の振動を耳の内部でとらえて、電気信号に変えて神経系により脳に伝えていきます。話し声だけではなく、環境から様々な情報について耳を通して得ています。その音は大きさや高さによって変化しますが、加齢などに伴って、高い音から聞こえにくくなります。40代から衰えが始まる場合もあり、75歳を超えると、人の約半数は難聴に悩まされます。男性は女性より難聴になりやすいということです。

難聴の主な原因は音を感知する細胞、特に蝸牛の中にある有毛細胞の摩滅と数の減少です。聴毛が抜け落ちると、音の情報を脳に送れなくなります。高い音を感知する細胞は蝸牛間の入り口に近く、すべての音の影響を受けて早く摩耗すると考えられます。

音が聞こえにくくなると、脳への負担が重くなってきます。しかし、自分に合っている補聴器を使用すれば、脳への負担を少なくすることが可能です。補聴器は様々ですが、蝸牛を通して音情報を奥へ送り、比較的、自然に近い音が聞こえるようになります。中には、雑音を消す機能を持っているものもありますが、どの機種でも慣れるまで聞きたい音を環境音から識別することが難しいかもしれません。また、聴覚を十分活用するには時

間が少しかかります。

周囲の人に協力を要請することも望ましいです。大きな音は聞こえやすくなるどころか、不快に感じますので、周囲の人はむしろ普通な声でゆっくり、はっきり話したほうがいいです。静かな場所で会話をすると、雑音が邪魔になりません。聞こえ、そして記憶力が回復すると、フレイルも認知機能も多少回復します。感性豊かな生活を続けることが大切です。早期発見ができれば、早期治療も可能ですから、周囲の人の意識も大切です。

なお、講演の終わりに、講師はいくつかの補聴器を紹介し、希望者には聴力検査と補聴器の試聴を実施し、受講生の質問に個別に応じました。

（文責 アンドリュー・デュアー）

第6回 東日本大震災から10年

講師 アンドリュー・デュアー（本学教授）

12/3（金）13:30～15:00

令和3年度第6回講座が2021年12月3日に開催されました。本学教授兼図書館長・同附属東海第一幼稚園園長のアンドリュー・デュアー先生により「東日本大震災から10年」というテーマでご講演をいただき、東日本大震災から10年経った現在の状況と課題につきまして、デュアー先生の実体験を踏まえながら、お話をいただきました。

まず、10年前の東日本大震災発災当時、デュアー先生が実際の福島での経験から話をされました。2011年3月9日の午後大きな余震があり、その後2011年3月11日2時46分ごろに緩やかな揺れから始まり、震度7の揺れが5分半も続いたようで、揺れが本格的に止まることはなかったとのこと。デュアー先生が避難しておさまるのを待っていたようですが、「いつになったら元に戻るかな？いや、元に戻ることに、ある？」と率直に思ったそうです。

あれから10年経過しましたが、「震災」の終焉や復興を待っている人は依然として多く、少なくない被災者にとって、「震災」はまだまだ終わってはいません。とくに、津波や原発の復旧・復興はまだ道半ばです。デュアー先生は常磐線が全線再開したのは2020年3月であることを強調します。また震災における死者数は、2021年3月には関連死の人数も加わり、19,747名にものぼり、2,556名はいまだに行方不明です。関連死、自殺、うつ問題は依然として深刻化しており、避難生活なども長期に続いており、2021年2月の時点で、約4万人は未だに避難中という状況です。

仮設住宅が一番多いときで、約 124,000 戸に及び、2021 年になっても 931 戸が残っており、経済面や気力の面で困難をもつ高齢者が多く残っているとのことです。世界銀行の推計では、東日本大震災は自然災害による経済損失額は史上第一位です。

デュアー先生は、阪神淡路大震災以降の建築基準の強化のために、地震そのものの影響は比較的少なかったが、津波や原発による被害の大きさを強調します。たとえば、岩手県・宮城県・福島県の 3 県で発生した 184 万トンの災害廃棄物と津波堆積物の処理が完了したのは 2017 年 3 月であり、6 年もかかったことから、その被害の大きさを物語っています。

東北の太平洋沿岸に住む人々は津波に慣れているとのことで、常に対策をとっていたそうです。たとえば、「てんでんこ」は、各自が命を守ることで、結果として生き残る数が多くなるという意味を持ち、古くからこうした教えを守ってきました。多くの小学校では「てんでんこ」を実践しており、教師はみんながそれぞれ、逃げるように指示しており、多くの子どもの命が守られました。

一方で、多くの人々は失った家族への想いをどのように処理するかについて、非常に困惑をしながら生活をしているという現状もあります。2011 年に岩手県大槌町のガーデンデザイナー・佐々木格が死別した従兄弟ともう一度話したいという思いから自宅の庭に設置した「風の電話」は、「天国に繋がる電話」として人々に広まりました。電話は実際には、どこにも繋がっていないが、生存者は「風の電話」を用いて、死別した家族への想いを風に乗せて伝えられます。津波で半壊した建物を一部残して、記念碑としているところがあるが、その痛い記憶をあえて残すのかどうかという点において、世論が分かれています。生存者の様々な想いをどのように考えていくのがとても大切な課題となりそうです。

東日本大震災における「復興」という用語は、基本的に「津波」の被害を処理するということを指していることが多く、特に防波堤の建設と強化、そして住宅街の高台への移転を意味するとのことです。一方で、高台移転に対する保障は不十分であり、津波が家を破壊しても、家のローンが残っていることが多く、高台で土地を買うとなると、二重ローンとなるなど、被災者にとっての「復興」という視点が非常に弱い点も指摘されました。また、政治家の発言も、被災者の生活を考えていないことが多々あるとの指摘もなされました。

また、原発事故については 10 年経った今でも、手つ

かずに残っている問題が数多くあるとのことでした。デュアー先生によれば、放射能は木や土壌に残るために、すべて伐採する必要があること、双葉・大熊・浪江町は依然として帰宅困難地域であり、一部帰宅するものもいるが、子どもにとって健康被害は非常に大きいために、実質的には当該地域には住むことは困難であることなどが示されました。震災当時の子どもの状況についての記録は刻銘にとるべきでありましたが、甲状腺に関するデータなどについては基本的には破棄させられてきた現実もあります。

デュアー先生のご講演から、地震・津波・原発被害等が 10 年経った今でも多くの被災者が依然として、生活に困難を抱えており、様々な思いを抱えながら生活していること、実質的な「復興」は道半ばであり、被災者の生活に寄り添った支援が必要であることを改めて学びました。日本は災害大国であること、また現在も全世界的に蔓延している新型コロナウイルスによる社会的・経済的影響を踏まえると、日本に暮らす人々にとってやさしく、希望のある社会になってほしいなど強く感じました。

(文責 石井智也)

第 7 回 名(迷?) 指揮者ダニー・ケイ

講師 菅野道雄 (本学教授)

12/17 (金) 13:30~15:00

令和 3 年度第 7 回公開講座が 12 月 17 日 (金) に開催されました。

今回の講師である菅野先生は、クラシック音楽を話題にした講座で、毎年アンカーを務めています。昨年はベートーヴェンのアニバーサリーということでその交響曲が取り上げられましたが、今年度のテーマが「ほがらかに生きる」ということなので、いつもとは違う、楽しい講座になりました。

今年はダニー・ケイという有名なコメディアンが、指揮者として登場するコンサートを取り上げました。映像ではニューヨーク・フィルのコンサートにダニー・ケイが登場する所からスタートしました。

彼は指揮者というよりもコメディアンであり、演奏を指揮すると思いきや、指揮台の上でコミカルに動き、喋ってみせ、会場を沸かせます。解説もいちいち適当なものです。

しかし、一度演奏が始まるとその指揮は冴え渡り、さらに会場を熱気と笑いに包んでいきます。

聴衆の心を一気に掴み取る、彼は迷指揮者であり、また名指揮者でもあったのでした。

(文責 工藤大介)

A Cheerful Lifestyle: Hints from the University
—Tokai Gakuin University and Tokai Gakuin University School
of Junior College Division 2021 Open Lectures—

University Social Contribution Committee

Abstract

This university offers a series of open lectures every year, organized by the University Social Contribution Committee and held in the university library. Each lecture is given by a faculty member. The overall theme asks participants to think about aspects of their lives they have begun to take for granted, and each individual lecture presents a topic of general interest related to the lecturer's field of research. Brief resumes of each lecture have long been posted to the university's home page, but since the topics relate to faculty research, they have been included in this year's research report.

Keywords : Open lecture, Healthy life expectancy, Dementia, Color, Kôşçak Yamada, Kôşaku Yamada, Nursery songs, Children's songs, Great East Japan Earthquake, Danny Kaye